アニメで人生が変わってしまったオジサン大学院生

明治大学大学院商学研究科
月岡　忠

1.　自己紹介

初めまして、2022年4月（本年4月）に明治大学大学院博士前期課程　商学研究科に入学いたしました月岡　忠と申します。大学院入学前の仕事は、非常勤講師時代を含めて42年間高校の教員を務めてまいりました。直近では埼玉県公立高校教諭として31年務め、一旦60歳の定年退職の後に再任用教諭として5年務めてまいりました。本年 3 月に県教職員の満期任用となって、4月より明治大学大学院にお世話になることになりました。教員免許は数種類持っていますが、採用教科は「商業」で、主に商業高校や商業科設置校などで簿記や情報処理をはじめ、商業の専門科目を担当しておりました。全国商業高等学校協会という団体で、商業を学ぶ生徒に向けて資格取得に係る検定試験の問題作成業務なども兼ねて行っておりました。

一方、部活動では、自分の高校時代弓道部（東京都代表でインターハイに個人出場しております）であったのと、大学生時代にプロの写真家を目指いていた時期もあり写真についてはある程度の知識も持っていたので、弓道部と写真部を指導していることが多かったです。中でも、写真部では指導した高校生を、8回ほど全国高等学校総合文化祭（文化部のインターハイ）に出場させることができました。

さて、ここまでは自分の公の足跡を書かせていただきましたが、もう一つの足跡について書かせていただきたいと思います。私は映画鑑賞が好きで、映画館に足を運び多いときは年間200本ほど、大きなスクリーンで映画を観てきました（大学院に入ってからは月に10本程度しか観れなくなりました）。中でもアニメ映画が推しで、気に入ると同じアニメ映画を20回位は繰り返し鑑賞します。さらに、気に入った作品は DVD や関連グッズを買い求め、入場者プレゼントやパンフレットなどを大事に保管しております。また、作品イベントや集まりにも参加し、仲間から「センセイ」と呼ばれて、イベント後には若い皆さんと一緒に作品について語り合っています。なぜ、そのような状況で呼ばれるようになったかは後述するとします。

2.　日本のアニメ市場規模は裾野が広すぎて正確にはつかめない

大学院商学研究科ですので、日本のアニメ産業について論じることにしたいと思います。

昨年発表された、2020年度のアニメ産業規模は2兆4261億円で、一年前に比べ884億円（3.5%減）減少したと発表されました。その市場規模は、生活に密着したパンの市場規模が2兆7000億円規模なので、ほぼ同等額程度であります。アニメ業界は作品そのものTV放映や映画館上映作品の売上げの他に、ライブイベントや関連商品の売り上げなどの経済効果が伴うので、コロナ禍で厳しい外出制限などによるイベント中止は大きな打撃となったようです。

年2回、東京で開催される「コミックマーケット」通称「コミケ」は、日本中からアニメファンが集まる一大イベントで、1975年が最初の開催と言われて現在に引き継がれています。基本的には世

界最大の「同人誌即売会」です。また、アニメ制作会社の作品登場人物のコスプレーション（コスプレ）やストーリーの作品二次創作（著作権についてはここでは触れないことにしておきます）の作品が売買されています。コロナ禍により現在は様々な対応の中で開催され、規模は小さくなってしまいましたが、コロナ禍以前の開催時は4日間で3万2千サークル、75万人の参加者（主催者発表データ）が参加。入場しています。正確なデータはなかなか掴めないですが、4日間での市場規模は100億円と言われています。さらに、全国各地からこの4日間のために東京への往復交通費、宿泊、飲食などの市場規模を含めると700億円というデータもありますが、正確な数値はなかなか計算できていません。数十万人のアニメファンが、この数日間のイベントで消費される一人当たりの金額は、単純平均でも諸経費込みで一人10万円近く使っていることになるので、このイベントに参加するために日ごろコツコツと働いて貯金しているようです。

また、東京の秋葉原周辺は高度経済成長期の頃までは電気街として発展を続け、特に白物家電を中心とした家電販売店が軒を連ねていました。その後1980年代に入り、全国各地の都市近郊に家電量販店が進出して、秋葉原に来なくても手軽に電気製品が買えるようになった影響で、秋葉原の家電販売店が閉店に追い込まれていきます。空き家となったビルに新たな住民としてビデオや雑誌の販売店が入居をしてきて、その集積地と情報発信の地域おこしとしてアニメの聖地「アキバ」が誕生しました（しかし、今でも駅構内の案内表示は「秋葉原電気街」となっています）。

アニメ文化は日本のサブカルチャーとして発展を続けていますが、栄枯盛衰の激しい業界で、爆発的に売れて記憶に残るアニメ作品もあれば、すぐに消えて記憶も記録も残さないアニメ作品もあります。

3. アニメは人生を変えてしまう　～ワタシはアニメオタク～

「アニメは人生を変える」

実社会でそれも学校の教員として働き、65歳で明治大学大学院シニア入試に入学したオジサンではありますが、ワタシのもう一つの顔は、俗にいう「アニメオタク」であります。それも60歳で人生をアニメによって大きく変えてしまいました。それは、運命的出会いでもあり、そしてその作品にかかわっている方々との繋がりが、私のもう一つの人生を作ってしまいました。

定年退職直前の年、私は埼玉県秩父郡にある生徒数200人にも満たない山沿いの小さな高校で写真部を顧問しておりました。部員たちは本当に素直で熱心で、毎日部活に取り組み、一緒に地元の風景や人情をカメラに収め、その作品をコンテストやコンクールに精力的に挑戦し、いくつもの大きな賞を受賞するなど活動的な部活でした。その活動評価を新聞や写真雑誌にも取り上げていただくことも何回もあり、大きな力を持っていました。その生徒たちの活動を地域の方々にも知っていただこうと、毎年3月に600人収容の地元ホールで、スライドショーによるその年の活動作品発表会を開催しておりました。しかし、文化部の写真部の発表には、どれだけ宣伝をしてもお客様が入場していただくことはなく、保護者や学校関係者以外には毎年20名程度の入場でした。生徒のモチベーションも下がり気味となり、私自身も定年退職を控えた最後の年、多分これが最後の発表会となるだろうと思った9月。「来年どうする。私にとっても最

後の発表会だけど何か案を出してくれ」と促すと、「何か映画上映でも」と生徒の意見。私自身、その考えは持っていましたが、公の会場を使用しての映画上映となると、権利関係や入場料の金銭関係など様々な未経験の事項をクリアしなければならず、これは無理と決め込んでおりました。

そんなある日、いつものように映画館に向かいましたが、見ようと思った作品に間に合わず、たまたま上映していたアニメ作品がありました。制作会社も聞いたことのないメーカーで、ポスターもなんだか女の子がポツンと何かの上に座っているだけの寂しいポスター。でも、これしかないので観ることにしました。お客様はある程度入っていましたが、まったく期待しないで観ることにしました。しかし、この作品が60歳の私の人生を大きく変える作品になるとは、その時は知る由もありませんでした。このアニメ作品を見終わった後、私の眼からは涙が止まらず真っ赤に腫れあがり、頭を大きなゲンノウで打ちのめされる衝撃が走りました。「この作品を観せよう。この作品を発表会で上映できないだろうか。」と心に決めました。

作品HPを見ると、その年9月に上映開始し、翌年の2月まで全国各地の映画館で上映される完全劇場オリジナル作品です。それを上映期間終了直後の3月に自主上映が可能だろうか？しかし、無理は承知で先ずは制作会社に私が観た作品感想とその作品を3月に、高校写真部の発表会で上映させていただけないかと手紙を出しました。待つこと半月、お返事は「趣旨は理解した。しかし自主上映に関しては制作会社としては、声優・監督など権利関係をクリアできないので、上映判断はできない。配給会社にはつなぎの連絡はするのでそちらに問い合わせ願いたい」。作品制作の権利関係や著作権の法的問題、さらに全国劇場公開直後には関連グッズやDVDの副作品の権利関係もあり、公開直後の自主上映は、学校関係での上映したことは聞いたことがないとのお返事でした。

しかし、ここで諦めずに一途の望みを抱いて同じような趣旨のお手紙を、配給会社に送りしました。なかなかお返事がきませんでした。そんなある時、該当作品を某映画館で開催の監督とプロデューサーの舞台挨拶上映会切符を購入することができました。なんとしても、この作品の監督や関係者の作品についての情報を得ようと思いの参加しました。すると、舞台挨拶の中でのお二人の会話に「ある高校からこの作品の上映会の企画が来ましたね」「そうそう、うれしいですよね」との会話。えっ、もしかして私の高校のこと？その翌日、配給会社から上映を許可する方向でいるので、上映に関しての情報共有と契約書の作成に入りたい旨連絡をいただきました。11月上旬、発表会まであと3か月（その間に期末考査。冬休み・入試機関など全く活動できない期間もあります）。

その後は、広報活動に伴う、著作権や法的関係さらには金銭的関係を一つずつクリアしていきながら、契約書を交わし正式に上映許可、つまり上映権を購入することができました。生徒は大喜びで発表準備にちからも入ります。私は発表会の広報活動、中でもアキバのアニメショップで開催される当該作品のイベントに高校も参加させて欲しい旨の直談判。アニメショップはアニメ作品が高校とコラボすることは今までなかったことなので、市場開拓の意味でも意義があるとご判断いただき、アキバのアニメショップに堂々と高校の自主上映会のアナウンス、そして校長の

英断で学校の公式HPには、なんとアキバのアニマショップでイベント紹介をアップし相互リンクを貼ってコラボしました。その状況から、新聞各社からも取材申し込みがあり、連日新聞記事にしていただきました。仲間の教員からは「今日も新聞沙汰ですね」と笑われる毎日でした。

上映会は入場料無料で、生徒のスライド発表の後に映画上映をする2回の公演。山の田舎の高校写真部発表会に、いったい何人のお客様に来ていただけるのか本当に心配でした。さて当日、ホールで上映準備をしていると、手伝いの生徒から「先生、大変来てください」と会場の外を見ると長蛇の列。開始前に既に100人以上のお客様が並んでいます。2回の上映で計300人以上のお客様にご来場いただき、後からアンケートを見ると北は宮城、南は徳島からのお客様がお見えになっていただきました。多くの方はアニメ作品が目当てではあったかと思いますが、生徒のスライド作品発表についてもアンケートには細かい書き込みを頂き、たくさんの評価いただきましたことは、本当にありがたかったです。実は、発表会の翌日が卒業式で3年生にとっては卒業式の前日まで部活動となりましたが、一生の思い出に残る大きなプレゼントをアニメ作品を通じて受け取ることができました。もちろん、定年退職前の最後の発表会となった私自身も、アニメ作品から大きなエネルギーを頂いたことは間違いありませんでした。

「アニメは人生を変える」。公開から6年を過ぎた今でも、この作品イベントが全国各地で行われ二次作品なども作られています。また、一昨年には原作の追加作品としてOVA（オリジナル・ビデオ・アニメ）も公開されるなど多くのファンがいる、記憶に残る作品として根強い人気があります。

作品は、戦争によって終末世界となり、人間が住めなくたったある封印都市（浜松が舞台）のデパート屋上プラネタリウムに取り残された解説員ロボットと、偶然出会った青年の作品です。人間の愚かな行為は、今現実に私たちに迫りくる戦争や病気などの不安、さらにはAI技術とどう向き合っていくかなどが問われる作品で「Planetarian　～星の人～」といいます。もしよろしければご覧になって下さい。あっ、ハンカチ持参がよろしいかと思います。

まだまだ、ワタシのアニメとの出会いは定年退職後の次の再任用の学校でも、再び人生を変えるようなことが起きましたが。それは、後日お話しさせていただきます。

ご精読ありがとうございました。

＜写真脚注＞

写真部スライド発表会で作成したポスターです。画像データなどは、制作会社から送られた指定されたデータを使い、加工が許可されました。右下に小さい文字ですが©が入り、このポスターは制作会社からの著作権などの関係を認められた物となっています。このポスターをアキバのアニメショップのイベントでも展示していただきました。

少女（ロボット）が腰かけているのは、プラネタリウム投影機です。兵庫県の明石市立天文科学館（子午線の真上にある科学館）のプラネタリウム投影機で、60年以上前に旧東ドイツのカール・ツァイス・イエナ社が製造した、日本最古で今も現役で稼働しいている投影機がモデルになっています。作品にも「イエナさん」という名前で登場しています。